

(別紙 2)

## 論文審査の結果の要旨

氏名 大久保純一

江戸時代後期の浮世絵師、歌川広重の版画を中心に、浮世絵における風景描写という主題を論じたものである。序章「浮世絵風景画研究史と本論の視点」は、研究史をきわめて明快に整理した上で、(1)浮世絵風景画を、それを生み出し受容した当時の人々の意識との関わりで理解する、(2)同時代の他の絵画領域との関係でとらえる、といういまだじゅうぶんに適用されていないふたつの視点を導き出している。以下の各章は、これらの視点を保持しつつ、平明で読みやすい文章によって具体例を分析し、序章の考察の姿勢を徹底しているといつてよい。

第一章「浮世絵の精神史」は、線遠近法を強調して室内や風景を描写する浮世絵に、しばしば〈枠〉が描かれているのに注目する。そして枠の存在は、浮世絵の母胎である覗き機械が持っていた、箱の中の仙境を覗き込む行為が、浮世絵そのものに対する意識として根強く残っていることを示すと解釈される。浮世絵の意味と機能を考える議論であり、従来の浮世絵研究に欠けていた重要な論点を持つといえよう。第二章「広重の名所絵の種本と空間構成」では、広重の取材源を明らかにした後に、透視図法的な空間の理解に関しては広重は北斎よりも巧みだったと考え得る、という意外で新鮮な、しかし説得力のある指摘がなされる。第三章「広重に見る江戸名所絵の定型」を踏まえて展開する第四章「《名所江戸百景》考」は、かつて浮世絵研究には用いられたことのない『東武日記』のような新しい史料も活用しながら、「名所江戸百景」の名所の選択のしかたや構成法などを分析し、このシリーズが江戸土産として制作されたのみならず江戸の住民をも鑑賞者として想定していたという仮説を、細かくすぐれた考証で示す。また、広重の風景画や花鳥画に四条派の絵画を思わせる特徴があるとは、かねてより漠然と考えられていたことではあったが、それを確かに実証するのが第五章「浮世絵風景画における四条派の影響」である。絵本というイメージを複製するメディアによって何が伝えられたのか、主として構図に関して詳細に明らかにされ、江戸後期の文化東漸の現象の一例としても非常に興味深い章となっている。第六章「銅版画と浮世絵風景画」では、亜欧堂田善が銅版画で描写した江戸名所図の特徴が、北斎、国芳、広重らの浮世絵に継承されていることを的確に論じる。

さらに望むならば、終章「まとめと課題」は要約に終わらず、そこにおいて全七章の論点を総合した総論が書かれてもよかつたろうが、全体として見れば他日を期してもよい些細な瑕疵ということになろう。各章の中でいくつもの重要な指摘がされ、広重と浮世絵風景画に関する研究を大きく前進させた本論文が、博士学位論文にふさわしい高い質を持つことは、何の留保もなく審査委員会が認めるところである。